HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『論考』における意義と意味の区別
Author(s)	中川, 大
Citation	哲学, 53, 81-94
Issue Date	2019-01-04
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/75564
Type	bulletin (article)
File Information	53_t6.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《特別寄稿》

『論考』における意義と意味の区別

中川　大

前足のかたちが似ているからといって、モグラとケラとを同種の動物だと思う人はあまりあるまい。そのいっぽう、似たかたちの前足は同様の機能や役割を果たしているだろうと期待はするし、じっさいそれは土を掘るという仕事に適している。本稿で試みるのは、リッカート（Rickert, H., 1863－1936）とウィトゲンシュタイン（Wittgenstein, L., 1889－1951）という――モグラとケラほど異なるのかどうかはともかく――およそ違った哲学の流れに身を置いているように思われる両者の「似た前足」を吟味することだ。

ふたりの似た前足とは、「意義（Sinn）」という用語と「意味（Bedeutung）」という用語との区別のしかたである。リッカートの用語法とウィトゲンシュタインの用語法は、フレーゲ（Frege, G., 1848－1925）の用語法と対立するものとなっている。よく知られているように、フレーゲは文（Satz）もまた名前（Name）であると考え、名前は一般に意義と意味の両方を有するとした。このとき、たとえば、「明けの明星」という名前と「宵の明星」という名前は、同じ意味（つまり「金星」とも呼ばれるあの天体）をもつが、意義は異なるとされる。しかし、「意義」と「意味」という語のこうした使い方は、日常のドイツ語に根拠をもつわけでもないし、また、哲学の用語法としても標準的なものではまったくない。

明確な使い分けをしない場合も多いと考えられる。それでもこのふたつの語を使い分ける議論をする場合には、名前が意味をもち、文は意義をもつ、とするのがフレーゲの流儀よりもむしろ一般的なのではあるまいか。[1] じっさいリッカートがそうであり、かれはこの用語法を、新カント派における価値の理論という枠組みに結びつける。いまひとりの同様の言葉遣いをする哲学者が、『論理哲学論考』[2]（一九二二年出版、以下では『論考』と略記）のウィトゲンシュタインである。つまりリッカートとウィトゲンシュタインは、意味を名前に、意義を文に割り当てるのに対し、フレーゲは、名前も文もともに、意義と意味の両方をもつと考えるのである。

こうした事情は、この問題系においてはフレーゲが突出した方法を採用しているのであり、ウィトゲンシュタインは新カント派に寄り添った用語法を採用しているのだと理解するべきなのであろうか。

この論文では、そうではないということを示したい。

あらかじめ結論を述べれば、『論考』における意義と意味の区別は、フレーゲに距離を置いて新カント派に接近しているどころではない。むしろそれは、新カント派の判断論からフレーゲが離反しているのと同じ方向に、さらにその歩を進めるものにほかならないのである。

以下ではこうした観点から、リッカートとフレーゲとウィトゲンシュタインの議論を検討していく。最後に瞥見するのは、『論考』の意義と意味の理論がフレーゲとその反新カント派的な戦略を共有しつつ、なおかつムーア（Moore, G.E., 1873－1958）やラッセル（Russell, B., 1872－1970）の判断論が目指す反フレーゲ的な方針と軌を一にしているということである。

1

リッカートの意義と意味の理論を検討するために、かれの「認識論の二つの方法」[3]という論文を取り上げる。この論文でリッカートは、ヴィンデルバント（Windelband, W., 1848－1915）以来の価値の哲学という枠組みに準拠しつつも、ヴィンデルバントやみずからの著書『認識の対象』[4]における心理主義的傾向を克服しようと試みている。[5]

そうした従来の心理主義的な立場を、リッカートは「超越論的心理学」と呼ぶ。そして、それと補完しあうものとして、「超越論的論理学」を提唱する。超越論的論理学の基本的な着想は、意義という概念が価値概念であることを明確にし、真理価値（Wahrheitswert）[6]を、文が意義をもつことに基づけることである。

まず、存在（Sein）の領域と価値（Wert）の領域とが峻別されなければならない。リッカートは、ある概念が存在概念であるのか価値概念であるのかを、否定という操作を通じて判別できると主張する。

すなわち、次のことがわかる。否定を存在概念と結びつけると一義的となり、価値概念と結びつけると両義的となる。そしてまた、否定を通じて一つの意味を得るか二つの意味を得るかによって、自分が有しているのが存在概念なのか価値概念なのかを知ることができる。[7]

存在の否定は端的に否定なのであって、無のみをもたらす。それに対して、価値の否定が意味しうるのは無のみではない。あるものをも、つまり否定的価値をも同じく意味しうる。このことから引き出されるのは、価値の概念には広狭二つの意味があるということだ。狭義での価値のみが、否定的価値すなわち無価値と対立し、肯定的価値と呼ばれうる。しかし、否定的価値と肯定的価値の両方が、広義での価値に属する。それは無価値と対立するものではなく、むしろ存在と対立するものでしかない。[8]

たとえば、「人間（menschlich）」という概念は、犬でも猿でもなく人という種に属すると述べるかぎりで価値概念ではなく、たんに存在概念である。それはそれを否定した概念を用いた「人間でないもの（das Nicht-menschliche）」という表現が、まったく内容を含まないことからわかるとリッカートは言う。しかし、「非人間（unmenschlich）」という概念は、同じく「人間」を否定した概念であっても、それとは違う。これは内容をもち、邪悪な人間について述べられる概念である。この意味での「非人間」という否定的価値に対立する肯定的価値を表わす「人間」が、上の引用で狭い意味での価値と言われているものである。（「ペーターは人間的である」というのがペーターを褒めていることになるのである。）いっぽう、「非人間」という否定的価値もまた価値ではあり、肯定的価値「人間」と否定的価値「非人間」を併せて広い意味での価値と捉えることができる。この広義の価値に対立するのは、もはや価値ならざる存在の概念としての「人間」ということになる。

リッカートは「自然（Natur）」も「人間」と同様のふるまいをすることを指摘する。しかし、この論文で眼目となるのは、「意義（Sinn）」が価値概念であるということにほかならない。

それゆえ広い意味では、意義は肯定的意義をも否定的意義をも等しく含んでいる。それは、価値が肯定的価値をも否定的価値をも含んでいたのと同様である。それに対して、肯定的意義という狭い意味においては、意義は無意義（Unsinn）と対立する。それは、肯定的価値が否定的価値に対立したのと同様である。それゆえ、意義が価値性格をもつのは明らかだ。語の広い意味での意義、つまり意義を留めていること（das Sinndifferente）は、ここでは無視する。この意味での意義がやはり依然として、われわれに理解可能な個々の語に結びつけられるものでないことを指摘すれば十分だ。個々の語は「意味」をもつけれども、しかしそれが文を表わしているのでないならば、語は没意義的で意義欠如的なもの（das Sinnindifferente und Sinnlose）であって、それゆえ、無意

義や反意義（Widersinn）とはやはり無縁である。文にのみ意義は付着する。それが肯定的意義であろうと、否定的意義つまり無意義や反意義であろうと[9]

語の意味は存在概念であり、価値にはかかわらない。価値概念としての意義を有するのは文だけである。というのも、文は真であったり偽であったりするものだからだ。真理という肯定的価値と虚偽という否定的価値とが対立するのは、「人間」と「非人間」とが対立するのと同様である。真でも偽でもない文は意義欠如的であり、その意味で真と偽は併せて広義の価値概念をなす。

こうして、リッカートの枠組みでは、文の部分である名前による表示は「意味（Bedeutung）」と呼ばれ、それは存在の領域に結びつけられる。それに対して、文が表わすものは「意義（Sinn）」と呼ばれ、それが価値の領域と結びつけられる。

2

認識がそれに従うものが対象であり、ゆえに当為や価値は対象であるというのが、リッカートが『認識の対象』で説いたところである。この見解と、真理が価値であり、認識は価値を前提するというヴィンデルバント以来の価値哲学のテーゼとを組み合わせるところに、リッカートの意義と意味の理論が現われる。

フレーゲの意義と意味の理論は、このような新カント派的な課題に対してどのように位置づけられるか。フレーゲの着想の根幹は、文を真理値の名前と見なすというところにある。わたしたちとしては、このフレーゲ的な解答が、ある意味において、存在が価値を前提するという新カント派的なテーゼを継承しているということに目を向けざるを

えない。フレーゲは、名前の意味が問題にされるときにはつねにそれが現われる文の真理値が問題にされる、という意味あいにおいて、認識内容が真理価値を前提することを認めている。

しかしながら、フレーゲのこの主張はまた同時に、真理値は対象であるのだから、むしろ文の意味と見なすべきだという議論を伴っている。この議論は、新カント派的な存在と価値の二分法を掘り崩すものにほかならない。

ここで、主張文全体の意義と意味について問おう。主張文は思想を含む。では、この思想は、文の意義だと見なすべきか、文の意味だと見なすべきか。文が意味をもつと仮定しよう。さて、その文において、ある語をそれと意味が同じだが意義は異なる語と置き換えても、そうすることによってその文の意味にいかなる影響も及ぼしえない。[10]

これまで見てきたように、構成部分の意味が問題となるときにはつねに、意味を求めるべきである。そしてこのことは、真理値を問うときにはつねにそうであり、また、真理値を問うときにのみそうである。

かくして、われわれは、文の**真理値**を文の意味として承認せざるをえなくなる。わたしが文の真理値と考えるのは、文が真であるという事情ないし偽であるという事情にほかならない。それ以外の真理値はない。簡便のため、前者を真（das Wahre）、後者を偽（das Falsche）と呼ぶことにする。[11]

名前は意義と意味をもつ。固有名の意味は対象であり、概念名の意味は概念である。名前の意義は、固有名や概念名によって対象や概念が意味されるその様式にほかならない。フレーゲは文をも名前だと考える。文の意義は思想であり、文の意味は真理値である。したがって、〈名前―意味―存在〉と〈文―意義―価値〉という、リッカート的な

二分法はここでは成り立たない。真理値という価値もまた、意味のうちに含まれるからである。

このように、フレーゲの意義と意味の理論（あるいは思想と真理値の理論）は、価値を認識内容に先行させるという、ヴィンデルバント-リッカート的な課題にひとつの解答を与えるものとして理解することができる。しかし、それを遂行するためにフレーゲが採用するのは、価値を意義ではなく意味の領域におくという着想であり、これは、価値の領域を存在の領域から独立したものとみなすリッカート的な構想を却下する見解にほかならない。

そして、フレーゲの理論においては、価値の領域が消え去る代わりに、真と偽という奇妙な対象を（文の意味として）容認することになる。また、主観的でもないが対象でもない、意義という領域が現われ出ることになる。ウィトゲンシュタインはこれらの構想と格闘することになろう。

3

フレーゲは固有名と概念名とを区別し、固有名に概念名が述語づけられて形成される文が真である――つまり、真という真理値の名前である――のは、固有名の意味である対象（Gegenstand）が概念名の意味である概念（Begriff）の下に落ちる（unter~fallen）ときであると考えた。[12] それに対して、『論考』のウィトゲンシュタインは、名前の意味は一般に対象であるとする。そして、文は名前があるしかたで配置されているという事実であり、それは対象があるしかたで結合しているという事実に対応するのだと想定する。

文記号は、その要素つまり語が、それのうちにおいて、ある特定のしかたとありかたで互いに関係し合うことにおいて成立する。

文記号は事実である。[13]

名は対象を意味する。対象は名の意味である。[14]

したがって、意味は名前がもつものであり、名前が対象を意味する。それに対して、対象がどのようなしかたで結合しているのかは、名指すことができない。対象がどのように結合しているのか、つまりどのような事態が生起しているのかというその事実は、対象ではない。

状況は記述されうるが、名指されえない。

（名は点に似、文は矢に似る。文は意義をもつ。）[15]

上の章節で「文は意義をもつ」と言っているその「意義」は、むろん「Sinn」の訳語なのであるけれども、ここでその「Sinn」は、むしろ「方向」という意味で使われていることが見て取れるであろう。ウィトゲンシュタインにおいて、文が意義を有するというのはつまり、文が方向をもつということなのである。[16]

注意しなければならないのは、真である文も偽である文も現実に対応するとされていることである。真である文は現実に対応するけれども偽である文はそうではない、とは考えないのだ。『論考』の言語哲学を、一種の対応説と呼ぶことができよう。しかしながら、それは、真理の対応説ではなく、文の有意味性の対応説なのである。

そして文が有意味であるとは、それが真か偽かであるということにほかならない。それがつまり、ウィトゲンシュタインが文は意義［方向］をもつと述べるときに言わんとしていることである。真である文は、いわば偽である文が

現実に対応するのとは逆向きに現実に対応する。[17]

像は事実と一致するかしないかである。像は正しいか誤っているか、真か偽かである。[18]

文が真か偽かでありうるのは、文が現実の像であることによってのみである。[19]

文「p」と文「~p」とは逆向きの意義をもつけれども、それらには同一の現実が対応する[20]

フレーゲの意義と意味の理論において、意義とは表現とも対象とも異なる第三の領域をなすものであった。しかし、以上で見てきたように、『論考』で意義と呼ばれるのは、文と現実という二つの事実のあいだの対応のしかたでしかない。

また、フレーゲにあっては、真と偽とは文という名前によって意味される対象であった。しかし、『論考』では、真と偽もまた、文と現実という二つの事実のあいだの対応のしかたでしかない。それはいかなる意味あいにおいても対象ではない。

フレーゲの真理値の理論は、真理値を文の意味である対象と捉えることによって、存在の領域と価値の領域とを峻別するリッカート的な構想を認めない。しかし、フレーゲは価値の領域と引き替えに、意義という新たな第三領域を残すことになった。『論考』のウィトゲンシュタインの議論は、真理値を対象と見なすことを拒否し、意義の領域をも消し去ることになる。

フレーゲにおける新カント派への批判的応答は、真理価値をも対象として名前の意味のうちに包摂する意義と意味

の理論として特徴づけられる。表現と世界のあいだの関係として、名前が対象を意味するという関係のみを残す『論考』の言語哲学は、そのかぎりにおいてフレーゲの反新カント派的な傾きをさらに強めた立場を取っている。

しかし、『論考』が名前の意味と文の意義について語るとき、フレーゲが想定した意義なるものは、まったく存在者としての地位を失っている。ウィトゲンシュタインが文の意義と呼ぶものは、文が現実に対応する（つまり、有意味である）その方向とでも表象するしかないものであり、いかなる内実も欠いているからだ。このかぎりにおいて、『論考』の言語哲学は、ムーアやラッセルの反フレーゲ的な判断論の構想と軌を一にしたものとなっている。『数学の原理』[21]におけるラッセルの項一元論（ムーアの「判断の本性」[22]論文での概念一元論を展開したものである。この論文で概念（concept）とムーアが呼んでいるのは、ラッセルが項（term）と呼ぶ命題の構成要素一般にあたるものであって、フレーゲ的な意味での概念ではない）は、フレーゲの意義にあたるものをけっして認めないからである。

いや、『数学の原理』では、表示概念（denoting concept）というフレーゲの意義に類比される道具立てが提示されるではないか、と問う人があるかもしれない。しかし、表示概念とは概念のうちのあるものであり、ラッセルにあっては、概念はもの（thing）とともに、項の下位分類でしかない。そして、項はあくまで命題の構成要素となるものであり、命題の構成要素となるのは――抽象的な存在者であることも具体的な存在者であることもあるにせよ――世界のうちに実在するものであって、フレーゲの意義のように第三領域をなすものではない。

そしてさらに、ラッセルは表示概念による説明さえをも捨て去ることになる。『数学の原理』では、名前に対応する命題の構成要素であるところの概念が、命題の構成要素ではない存在者を表示する、という構図を採用していた。これはたしかに、意義によって意味が規定されるとするフレーゲ的な説明に類比されうる。しかし、いわゆる記述理論を提示した「表示について」[23]では、『数学の原理』以来の（1）命題のなかに現われるもの（あるいは命題の構成要素であるもの）と（2）命題がそれについての命題であるようなそのものとの区別を保持しつつ、しかし、（1）

のうちに含まれる概念が（2）であるような対象を表示するという説明は放棄される。記述理論において残される表示関係は、*any* による表示――つまり変項 *x* による表示――のみである。[24]

フレーゲ的な意義と意味の区別を拒否するこうした路線は、ムーアの「判断の本性」論文によってすでに準備されていたと言うべきであろう。ライル（Ryle, G., 1900－1976）は、「判断の本性」でのムーアの議論を批判して、フレーゲ的な意義と意味の区別を適用すれば、ムーアがこの論文で陥ったアポリアは容易に回避できると論じている。[25] しかし、わたしたちの着眼点からすれば、ライルの指摘するアポリアはむしろ、ムーアの枠組みがけっしてフレーゲの意義と意味の理論を許容しないものであることを含意していると理解できる。[26]

さて、リッカートの意義と意味の理論は、意味を名前に、意義を文に割り当てる議論を通じて、価値の理論を言語哲学的に基礎づける超越論的論理学の立場を開示した。また、文をも名前と見なし、名前一般に意義と意味の両方を認めるフレーゲの意義と意味の理論は、いっぽうでリッカートと同様にヴィンデルバント的な課題に答えつつ、そのいっぽうでウィンデルバント－リッカート的な存在と価値の峻別を掘り崩し、新カント派的な価値の理論と鋭く対立するものでもあった。

わたしたちが見てきたのは、ウィトゲンシュタインの『論考』での意義と意味の区別は、意味を名前に、意義を文に割り当てるという、そのみかけ上のリッカートとの類似にもかかわらず、むしろ新カント派的な価値理論を拒否することにおいて、フレーゲの立論をさらに先鋭化するものであったということである。そしてまた、ウィトゲンシュタインの意義と意味の理論は、フレーゲ的な意義の領域をも還元してしまうという点において、ムーアやラッセルが提示した英国新実在論の反フレーゲ的な路線をも同時に継承する議論なのである。

(1) フレーゲ自身、かれのよく知られた用語法を採用する以前の『算術の基礎』(Frege, G., *Die Grundlagen der Arithmetik*, 1884, Breslau Verlag von W. Koeber. 三平正明・土屋俊・野本和幸訳、『フレーゲ著作集3　算術の基礎』、野本和幸・土屋俊編、二〇〇一年、勁草書房、二五～一七四頁)ではそちらに寄った言葉遣いをしているのではないかというふしもある。野本和幸『フレーゲ哲学の全貌』、二〇一二年、勁草書房、三五九頁参照。

(2) Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus* (with a new Translation by Pears, D.F. & McGuinness, B.F.), 1963, Routledge & Kegan Paul. 野矢茂樹訳『論理哲学論考』、二〇〇三年、岩波文庫。

(3) 注7を参照せよ。

(4) Rickert, H., *Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die Transzendental-Philosophie*, 1892, 1904, 1915, J.C.B. Mohr. リッケルト『認識の対象』、山内得立訳、一九二七年、岩波文庫は、原著第二版に基づく。

(5) リッカートの哲学の展開については、九鬼一人『新カント派の価値哲学―体系と生のはざま―』、一九八九年、弘文堂が参考になる。

(6) 元来はヴィンデルバントの用語であり、通常「真理値」と訳されるフレーゲの用語もこれを借用したものと考えられている。フレーゲと新カント派との関係については、Gabriel, G., „Frege als Neukantianer", *Kantstudien*, 77, 1986, S.84－101, Carl, W., "Frege—A Platonist or a Neo-Kantian?", Newen, A., Nortmann, U. & Stuhlmann-Laeisz, R. (eds.), *Building on Frege : New Essays on Sense, Content, and Concept*, 2001, CSLI, pp. 3－18, Sluga, H., "Frege on the Indefinability of Truth", Reck, E.R.(ed.), *From Frege to Wittgenstein : Perspectives on Early Analytic Philosophy*, 2002, Oxford U.P., pp.75－95などを参照されたい。

(7) S.203 in Rickert, H., „Zwei Wege der Erkenntnistheorie", *Kantstudien*, 14, 1909, S.169－228. 山内得立訳(抄訳)「認識論の二途」(リッケルト『認識の対象』、山内得立訳、一九二七年、岩波文庫、二七三～三五二頁)、三二〇～三二一頁。この論文の概要については、中川大「フレーゲ真理論における規範と自然―「思想」第1段落の解釈をめぐって―」、『行為と認知の統合理論の基礎』、平成14～16年度科学研究費補助金(基盤研究B2)研究成果報告書、研究代表者：新田孝彦、研究課題番号14310001、二〇

○五年、二〇一～二一三頁をも参照されたい。

(8) S.204 in *op. cit.* 邦訳三一一頁。

(9) S.206 in *op. cit.* 邦訳三一三～三一四頁。

(10) S.32 in Frege, G., „Über Sinn und Bedeutung", *Zisschr. f. Philos. und philos. Kritik*, NF 100, 1892, S.25－50. 土屋俊訳「意義と意味について」、黒田亘・野本和幸編『フレーゲ著作集4　哲学論集』、一九九九年、勁草書房、七八頁。

(11) S.33－34 in *op. cit.* 邦訳八〇頁。

(12) フレーゲ『算術の基礎』(前掲) のほか、論文「概念と対象について」(Frege, G., „Über Begriff und Gegenstand", *Vjschr. f. wissensch. Philosophie*, 16, 1892, S.192－205. 野本和幸訳「概念と対象について」、黒田亘・野本和幸編『フレーゲ著作集4　哲学論集』、一九九九年、勁草書房、四九～七〇頁) などを参照されたい。

(13) 3.14 in Wittgenstein, L., *Tractatus.*

(14) 3.203 in *op. cit.*

(15) 3.144 in *op. cit.*

(16) 「論理に関するノート」(*Notes on Logic* 1913) では、ウィトゲンシュタインは次のように述べている。「文 (proposition) はそれが事実 (fact) とかかわる基準である。名前 (name) についてはそれとは別である。こうして二極性と意義 (sense) とが登場する。一本の矢が別の一本の矢と同じ方向 (sense) にあることによってかかわることも反対の方向にあることによってかかわることもあるのとちょうど同じように、事実は文とかかわる。(中略) わたしの理論では、pとnot-pとは、同じ意味 (meaning) をもつけれども、反対の意義(セ)／方向(ス)をもつ。意味とは事実である。適切な判断理論は、ナンセンスを判断することを不可能にするのでなければならない」(p.95 in Wittgenstein, L., *Notebooks 1914－1916*, 2nd Edition, Ed. by G.H. von Wright and G.E.M. Anscombe, 1979, The University of Chicago Press. 奥雅博訳「論理に関するノート (一九一三年九月)」(一九六一年の原著第一版による翻訳)、『ウィトゲンシュタイン全集　1』、一九七五年、大修館書店、二九八～二九九頁)。わたしたちの関心からして興味深いのは、この時期のウィトゲンシュタインが、文が意義と意味の両方を有することを認めるような言葉遣いをしていることである。もっとも、文

の意味は真理値ではないのだけれども。

(17) ウィトゲンシュタインの意義／方向論について、ラッセルの判断論とのかかわりにおいて論じた次の論文がある。中川大「方向と意味―ウィトゲンシュタインのカント的転回―」、『論理学・数学の哲学的基礎づけに関する実在論、構成主義、物理主義の体系的比較と評価』、平成13～16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書、研究代表者：岡本賢吾、研究課題番号13410、二〇〇五年、九～一七頁。

(18) 2.21 in Wittgenstein, L., *op. cit.*

(19) 4.06 in *op. cit.*

(20) 4.0621 in *op. cit.*

(21) Russell, B., *The Principles of Mathematics*, 1903, George Allen and Unwin.

(22) Moore, G.E., "The Nature of Judgment", *Mind*, n.s. 8, 1899, pp.176－193. 中川大訳「判断の本性」が、『英国新実在論の成立についての哲学史的基礎研究』、研究課題番号22520001、平成22～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、研究代表者：中川大、二〇一五年の四〇～六一頁に収められている。

(23) Russell, B., "On Denoting", *Mind*, n.s. 14, 1905, pp.479－493. 松阪陽一訳「表示について」、松阪陽一編訳『言語哲学重要論文集』、二〇一三年、勁草書房、五九～八八頁。

(24) こうした事情については以下の論文に詳しい。中川大「記述の理論はなにを変えなかったのか―ブラッドリーのラッセル批判を手がかりに―」、『哲学年報』五五号、北海道哲学会、二〇〇八年、左五五～左六九頁。

(25) Cf. Ryle, G., "G. E. Moore's 'The Nature of Judgment'", Alice Ambrose and Morris Lazerowitz (eds.), *G. E. Moore : Essays in Retrospect*, 1970, Routledge, pp.89－101.

(26) 次の論考を参照されたい。中川大「ムーアは発狂していたのか」、『英国新実在論の成立についての哲学史的基礎研究』、研究課題番号22520001、平成22～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、研究代表者：中川大、二〇一五年、四～一三頁。